

百姓一揆と義民の研究要旨

保坂 智

百姓一揆研究を進展させるために、いつかの克服すべき課題が存在する。その一つは、義民＝越訴と竹槍蓆旗＝暴動＝武装蜂起という百姓一揆像を解体する必要がある。この百姓一揆像は自由民権期に成立した。知識人・豪農の民権家たちは、民権伸張のために身を粉にして働く自らの姿を、近世期に百姓の困窮を幕府や藩に直訴することによって解決した義民たちに重ね合わせたのである。彼らにとっての理想的な百姓一揆は、佐倉惣五郎に代表される越訴であった。一方、竹槍蓆旗でイメージされる百姓一揆とは、粗末な武器と粗末な旗で幕府・諸藩に立ち向かう姿である。竹槍は百姓一揆の暴力性の象徴であった。民権家たちはこの竹槍蓆旗を、悪政に立ち向かうためにはやむを得ないものであるとして否定はしなかったが、愚民あるいは暴民によってひきおこされた事件と認識された。

一九一〇年代末から三〇年代にかけて、米騒動、小作争議、労働運動などの社会運動が高揚するなかで、百姓一揆研究は本格的に開始された。この時期の代表的な研究者である黒正巖は、最初に百姓一揆の大量分析を行ったものとして注目される。しかし、彼の百姓一揆像もまた義民と竹槍蓆旗を超えるものではなかった。黒正は強訴を暴力行使としてとらえ、好ましからざる運動と考えていた。それに対し高度で理想的な抵抗手段としての越訴と、より暴力性の低い逃散を抽出した。強訴・越訴・逃散という百姓一揆の基本的闘争形態区分がここに成立し、今日まで受け継がれていくことになる。

一方、マルクス主義史学は百姓一揆を封建制下の基本的階級闘争ととらえ、歴史を推進するものとして積極的に評価し、研究を深めた。そこで求められたものは、「封建的階級的搾取関係の打倒のための闘争」（羽仁五郎『幕末における社会経済状態・階級関係および階級闘争』）であり、「奴隸的従順をかなぐり捨てて暴力をもって反抗」（同前）する暴動の闘争形態であった。それは竹槍蓆旗として百姓一揆像の読みかえに過ぎなかったのである。

戦後、百姓一揆研究は飛躍的に前進した。しかし、百姓一揆の闘争形態や運動構造に関する研究は、戦前の段階を大きく超えるものではなかった。戦後すぐに展開した国民的歴史学運動は、百姓一揆を主要な対象とする研究活動であるが、その中で描かれる百姓一揆とは、農民的英雄と革命的大衆蜂起を理想としており、義民と竹槍蓆旗を超えることはなかった。戦後の百姓一揆研究を集約した青木虹二の年表も、その闘争形態区分は黒正以来の強訴・越訴・逃散に打ちこわしを加えたものに過ぎなかった。この根強い義民と竹槍蓆旗像を克服し、新たな百姓一揆像、とりわけ闘争形態区分を構築すること、これが本稿の第一の課題である。

戦後の百姓一揆研究の大きな成果は、百姓一揆を変化・発展するものとしてとらえたことにある。その最初で最大の成果は、堀江英一が提唱した代表越訴一惣百姓一揆一世直し一揆という発展段階論である。その後、林基により全藩一揆から広域闘争へという領域に基づく段階規定が提唱されたが、堀江の見解はいまも通説の地位を保っている。

堀江にとって百姓一揆の三類型をわける基準は、百姓一揆の闘争主体の階級的・階層的な性格であった。もちろん堀江は、越訴・強訴・打ちこわしという闘争形態にも留意しているが、一揆の質を決めるのはあくまでも闘争主体の経済的分析であった。堀江以後の百姓

学位論文

4578

2

一揆研究は、その闘争主体を抽出することに努力がそそがれ、村落の階層構成を明らかにすることに終始する論文が多くなった。百姓一揆の運動過程の中で注目されるのは要求であり、とくに農民層分解に直結する商品生産・流通の要素の有無に向けられた。百姓一揆の研究と銘打ちながら、百姓一揆そのものの経過分析は添え物のような研究事例も少なくないのである。一九六〇年代末から七〇年代にかけての佐々木潤之介らの世直し状況論は、百姓一揆研究の最後のピークであるが、ここでも経済構造の分析をもって百姓一揆研究に代替するという従来の研究方法を克服することができなかった。

経済史的分析によって抽出される階級・階層構成と、民衆運動の間にずれが生ずるのは当然である。そして経済史研究とは相対的に独自の民衆運動史研究の必要性はこの点にある。民衆運動史研究の一環としての百姓一揆研究の必要性もここにある筈である。そのためには百姓一揆を経済構造の中に還元するだけでなく、百姓一揆の運動構造そのものの分析は不可欠なのである。そして百姓一揆の生成・変化・解体を百姓一揆の運動そのものから見ていくことが必要である。そしてそれを突き詰める中から、通説としての堀江の発展段階論を乗り越える新たな発展段階規定が生まれると考えている。この点が本稿の第二の課題である。

これらの課題を追求するにあたり、本稿では個別一揆の分析を蓄積するという方法をとらず、全国の百姓一揆を大量観察するという方法をとった。その方法こそが百姓一揆の本質を解明するために有効であると考えたからである。そして現在はそれを可能とする条件が与えられていると考える。戦前から戦後にかけて、百姓一揆研究が盛んとなると、百姓一揆関係史料の発掘と公刊が進み、良質な史料集が多数生まれた。また、戦後の自治体史編纂の過程でも多くの百姓一揆史料が発掘され、公開された。この膨大な史料群は、ついに全国の百姓一揆史料を編年で編集するという『編年百姓一揆史料集成』の刊行を可能にしたのである。

本稿は、第一部「百姓一揆の作法と闘争形態」と第二部「義民物語の成立と展開」の二部から構成されている。先述したように、百姓一揆研究の発展のためには、義民と竹槍蓆旗という百姓一揆像を解体させる必要がある。そのためには事実としての百姓一揆を分析するだけでは十分ではない。後世の人々が作り出したフィクションとしての百姓一揆像、とりわけ義民物語に対する再検討が必要なのである。

第一部第一章は「一揆・徒党概念と闘争形態」と題し、強訴・逃散などの闘争形態や、一揆および一味・徒党という百姓一揆を理解する上で基礎となる諸概念の再検討を課題とした。これらの語句は、歴史学の概念であると同時に、近世社会での使用されていた史料文言である。我々が歴史学の概念として使用するためにも、まず当該社会で、いつから、どのように使用されていたかの厳密な検討が必要であると考えた。またこれらの文言の使用事例を再検討することにより、従来の百姓一揆の発展段階論を乗り越える観点が見いだしうると考えた。分析の結果以下のような結論を得た。

中世以来の土豪層と農民の武装蜂起が近世民衆運動の最初に存在し、それは一揆という文言で表現されていた。この一揆が一六三〇年代に鎮圧されると、あらたに一味・徒党という文言が史料に登場するようになる。この徒党は中世以来の組織体としての一揆の流れを汲むものであるが、幕藩領主はそれをも禁圧しようとした。さらにこの一味・徒党を形成する主体は、小百姓たちであり、彼らは領主に対決するとともに、村役人の特権行使・

非分に対しても闘争を展開したのである。この一味・徒党として掌握される運動こそ、百姓一揆の第一段階である。

一八世紀に入ると強訴文言が登場する。この新しい運動は一揆という文言では表現されなかった。それは一揆という文言が武装蜂起を意味し、強訴は武装蜂起ではなかったからにはかならない。この時代は同時に逃散の時代でもあった。第一段階にも存在した逃散は、この時期強訴とならび各地で展開し、幕府もこの二つを併記して禁圧しようとしたのである。この時期を百姓一揆の第二段階として把握でき、もっとも典型的な百姓一揆が展開した時代であった。

一八世紀末、領主への訴願が欠落するか、極めて薄い世直し一揆的な闘争が出現する。この変質しはじめた百姓一揆に対し、人々はあらたな概念語を創出するのではなく、一揆という文言で理解した。しかしこれは武装蜂起としての一揆の復活を意味するものではないのである。これが百姓一揆の第三段階である。なお、本章では越訴についても言及したが、それは主として第二部第一章で展開しており、そこでのまとめにかえる。

第一部第二章「百姓一揆の作法」と第三章「百姓一揆作法の成立と変質」は、全国の百姓一揆に共通する組織形態、行動様式を百姓一揆の作法としてとらえた。二章ではその作法の共通する特質を、三章では作法の各要素の成立とその変質を考えた。二章では、まず一揆議定や車連判の分析から、一揆という組織がもつ連帯責任と構成員間が平等であるという特質を見た。つぎに一揆の動員原則や旗などから百姓一揆が村連合組織であることを見いだした。さらに百姓たちが百姓一揆に参加するときの得物と出立から、自分たちが百姓であることを強調しようとする意識を見た。それは本来的に百姓一揆は「百姓成立」や「百姓相続」を、幕藩領主に百姓として要求する運動であることに起因する。百姓一揆では幕藩領主は自明の前提とされ、彼らの「御救」に期待するものであり、幕藩制を一時的にせよ乗り越え、百姓身分からの解放を求めたものではないことを確認した。

三章では百姓一揆の作法を、一揆議定、動員方法、旗、得物、出立の五点にわたりその成立と変質を検討した。それを時代的変遷を中心にまとめればつぎのようになる。一揆議定の作成は、一味神水・起請をとともなう中世以来の形態を継承していたが、元文期になると起請行為を伴わない形式が増加し、近世的な一揆議定形式が確立してくる。廻状による一揆への動員は、強訴形態の百姓一揆の出現と同時に行われた。その廻状に参加強制文言が付随するようになるのは宝暦期以降のことである。さらに天明期の米騒動に出現した張札や落文という村を媒介としない呼びかけは、文化期以降百姓一揆の動員方法の主流となる。百姓一揆に出現する旗は、村旗を基本とし、寛延期以降一般化する。天保期に入ると村旗のほかに一揆のスローガンなどを記す旗が出現する。強訴の際の得物の携帯は享保期後半から見られるが、元文から寛延期にかけて百姓らしさを強調するものと意識されるようになる。得物の変化は寛政期に見られ、竹槍携帯が一般化する。また天保期には無宿により刀・脇差という武器が持ち込まれるようになるが、その後の百姓一揆の主流となることはなかった。百姓一揆の出立である蓑笠は、得物の携帯とともに百姓らしさを強調するものであったが、その出現は元文期であり、宝暦期に定着する。天保期には、正体を隠したり、逆に派手な衣装でパフォーマンスする新たなタイプが出現し、幕末の世直し一揆に継承される。これを総括すれば、一七三〇年代の元文期に百姓一揆の作法が成立し、一八世紀末から一九世紀初頭の天明から文化期に作法が変質をはじめ、一八三〇年代の天保期

に作法の解体を示す動向が出現するということになる。これは一章で見た百姓一揆に対する用語の変遷と概ね合致し、そこでたてた百姓一揆の発展段階規定をより詳細に分類する基準たり得ると考える。なお、四章「百姓一揆における村と個人」は、一八五三年の盛岡藩三閉伊一揆における非発頭村落における動員の実態と、「四五人衆」という一揆を代表する組織の分析から、百姓一揆が村連合組織であることを実証したものである。

五章「百姓一揆と女性」は、従来の百姓一揆研究で取り上げられてこなかった女性と一揆の関わりを論じたものである。近世期を通じて一揆・騒動は数多く発生したが、その前面に女性が登場することは少なかった。それは、一揆・騒動では「暴力」の行使—それは武力を排除したものであるが—想定される局面があることに起因する。だから女性が参加する場合でも、米騒動に典型的に見られるように、「暴力」の行使である打ちこわしの段階ではほとんど見られない。

しかし反面、女性の参加する一揆・騒動もめずらしいものではないことを確認した。それは「挙家」逃散、米騒動と強借、女性の越訴、強訴の中の女性という四点で確認できる。初期を中心に展開する「挙家」逃散を除いて、女性の参加する一揆・騒動には二つの原則が存在した。その一は、女性が家を代表して参加するということである。数多く存在した女性の駕籠訴も、夫たちが処刑・入牢などで欠落した後で、その家を代表して女性が行ったものであった。その二は、近世社会における女性の社会的分業にかかわる問題である。米騒動や女性の労働に対する賦課を原因とする一揆への女性の参加がそれである。しかし彼女たちが一揆・騒動の前面に出ないことを、女性が一揆に関係しなかったと見るのは正しくなく、女性たちは夫や子どもという男性の一揆への参加を支えていた事実もまた重要視されなければならないであろう。なお、明治期に入ると女性の一揆参加事例が増え、頭取となる事例も出てくるが、これは三節三項で分析した。

六章「明治初年一揆の行動様式」は、明治初年の諸一揆を作法論的に分析したものである。特に持物と出立、毀焼と殺傷、一揆の構成に分けて考察した。二・三章で展開したように、近世期の百姓一揆は暴力、とりわけ対人殺傷と放火を封印したことを特徴としていた。しかし、幕府の崩壊による社会的混乱の中で、百姓らは暴力を発動するようになった。とりわけ明治四年に相次いで打ち出される維新政府の「新政」は、社会混乱に拍車をかけ、一揆の暴力も激化していくこととなる。

この暴力の主要な武器が竹槍であった。天保期以降百姓一揆の作法が崩壊をはじめた。異形な出立で抜き身の刀鎗をひっさげた悪党たちが、作法解体の主役であった。しかし、維新後の一揆における暴力は、この悪党の暴力の延長上にあるのではなかった。悪党たちは明治元・二年の世直し一揆が終結すると、彼らが一揆に持ち込んだ暴力の象徴としての刀鎗とともに退場する。

刀鎗は武器として強力であったとしても、一揆では一部のものが所持するにとどまった。一方竹槍は、一揆衆の大多数が所持することで威力を発揮する。言い換えれば、一揆衆の大多数が携帯しうる武器であった。新政反対一揆になると、一揆の持物は急速に竹槍一色となっていく。近世期の得物の代表であり、百姓意識を象徴した鎌はほとんどみなれなくなっていく。ここに近世期一揆の得物原則の崩壊を見ることができる。

新政反対一揆は、全村全戸の根こそぎ動員が行われた一揆であり、村を単位として村連合としての一揆という側面は継承され、一層徹底したものであった。ただこの彼らが竹槍

を使って暴力を行使し、しかも現実にこの竹槍を使用した殺傷が行われたのである。

この一揆の暴力は権力による武力弾圧に誘発されたという側面があったことはみのがせない。しかしより根本的には、維新政府の新政が旧来の生活、社会習慣などを根底からゆるがした結果である。新政による社会不安は、種々の流言を生み出すことになったが、その中核に「生き血を搾る」とか「婦女子を供出する」など、直接的な肉体的恐怖を伴うものがあつた。そのような「政策」を実行する者は絶対的悪として措定され、その彼らに対して直接的な暴力がふるわれたのである。

この社会不安の中に、部落解放令に伴う被差別民の当然の権利拡張の動きがあつた。一揆の暴力は、この被差別民に対してもっとも激化した形でふるわれた。被差別民の集落に放火し、女性や子どもを含む被差別民を竹槍や鉄砲で殺傷したのである。この残虐な行為は、百姓一揆などをつうじて形成された「御百姓意識」の、まさに負の側面の表出であつた。

新政反対一揆も、県へ要求を提出して収束する。その点では強訴形態の一揆であるとも見ることができなくはない。しかし、県と一揆の間には、かつて藩と一揆の間にあつた「信頼」関係はもはや存在しなかつた。だからこそ、一方で要求を提出しつつ、その要求提出相手である県役人や県庁を襲撃し、殺傷し毀焼するのである。

「仁政」による「百姓成立」の保証、これが近世期の百姓一揆がもつた正当性の根拠であつた。しかし維新政府は「仁政」の政治構造を放棄し、百姓という身分規定そのものを否定した。一揆は百姓としてその経営の「成立」と「相続」を要求する根拠を失つた。だから、彼らは百姓身分の象徴としての蓑笠を脱ぎ捨て、鎌に代表される得物を放棄し、竹槍を携帯したのである。

彼らは百姓一揆の伝統に従って県庁に押し寄せた。そして県官に新政の廃止を要求した。しかし、それらの政策は中央政府が施行したものであり、一地方機関である県には裁量の余地のないものであつた。ここに新政反対一揆が敗北しなければならない必然性が存在していた。それは封建的割拠制と、政治支配原理としての仁政構造の中で出現した百姓一揆が、その歴史の幕を引かなければならない根拠でもあつた。

七章は、明治初年一揆の例として、明治二年の高崎五万石騒動の作法を分析したものである。ただこの五万石騒動は、のちの新政反対一揆や、この時期広範に展開していた世直し一揆としての性格を持つものではなく、全藩強訴一揆の作法の最後の姿であることを分析した。

第二部は「義民物語の成立と展開」と題した。従来の義民伝承というとらえかたは、百姓一揆の事実を人々が伝承してきたのであり、長い年月の間に変化は生じるものの、その基本は事実であるとする考え方である。それに対し本稿では義民物語として義民をとらえた。それは語りつがれてきた伝承や、そのときに存在した史料が使われるものの、物語は意図をもって作られたフィクションであるとするものである。義民物語の研究とは、そのフィクション性を明らかにするとともに、フィクションの内容とその意図を解明することである。

従来の義民に対する認識は、佐倉惣五郎のように越訴型の闘争形態をとり、その越訴故に厳しい処罰を受けたとされてきた。一章「越訴と義民物語」は、この越訴という訴訟形式の違法性についての考察を主題とした。「公事方御定書」における越訴規定、幕府の越

訴に対する判決事例、初期の将軍・大御所への直訴の事実などから、越訴という訴訟形式そのものは、「天下の大禁」を犯すものとして厳罰に処されるというものではなかったこと、越訴者に対する刑罰は多様であるが、軽微なものの比重が高く、またその処罰の多様性は越訴そのものより越訴に付随する諸条件が量刑決定に与えた影響が大きかったことを明らかにした。そうであるからこそ、寛政期の勘定奉行は、「箱訴又は駕籠訴いたし候段は不束迄」であると認識していたのである。

越訴型義民物語は、義民は越訴した故に厳罰に処されたとする。これが幕藩制の現実の越訴に対する処理原則に相違するのであるから、そこに物語のフィクション性を見なければならぬ。一章とともに二章「義民物語の構造」で、そのフィクション性を明らかにしようとした。義民型越訴物語が多く流布するようになるのは、江戸で歌舞伎として上演された佐倉惣五郎物語の影響が大きく、各地の義民物語が惣五郎物語へ同化していった結果であった。また、義民物語に貫く意識の一つに、強訴のような集団的行動を乱民暴徒としてとらえる視点があった。義民たちは強訴から遠ざけられ、違法な強訴の非を説き、自身の身を犠牲にして越訴する理想的な人物として描かれたのである。

このような義民物語は、佐倉惣五郎の物語がそうであるように、一八世紀後半に形成された。同時期の一揆は、村落内の階層分化の進展により、村役人層への激しい打ちこわしを伴う強訴が一般的であった。この現実に対して、あくまでも村役人層の主導のもとに對領主訴願を置くこと、それが越訴であったのである。一九世紀に入ると天保の飢饉や開港の影響により村内の対立関係は一層激化するが、それは義民物語と義民顕彰の必要性をますます拡大させることになる。そして明治維新後の近代社会も、寄生地主制が進展するように、この村落内の対立を解消する方向へと進まなかったから、義民物語と顕彰行為はさらに活発に展開するようになる。さらに、幕府時代の政治は強権的であり、上意を下達するのみで下意を上達する方法がない時代という、明治政府を肯定的にとらえるために生み出されてくる理念が、越訴厳罰論を正当化し、越訴型義民物語を一層普及させたのである。

義民物語がこのように一八世紀後半以降に作られたものであったとしたら、この義民物語を根拠に主張された代表越訴型一揆という認識は、フィクションとして否定されなければならないものとする。

義民はたんに物語として存在するだけでなく、後代の人々によって顕彰されてきた。従来、義民が顕彰されていく背景として、彼らが怨霊となり、それを鎮魂し慰霊する必要があることが強調されてきた。しかし全国の義民物語では、必ずしも義民は怨霊となるものばかりではなかったのである。怨霊とならないばかりか、処刑されない義民も存在していることを明らかにした。では彼らが顕彰される理由はなんであったのか。それは義民たちが身を犠牲にして勝ち取った諸権利を「先例」として後世に伝えるものであると考えた。この先例の維持と確認は、怨霊型の義民物語にも見いだすことができ、近世期の義民顕彰の基底にあると考えた。

一般的に、義民は一七世紀後半の代表越訴型一揆から輩出されたと考えられてきた。それに対する疑問の提示が三章「近世初期の義民」と四章「義民の年次的・地域的考察」である。三章では、一七世紀という近世初期に出現する義民は、村間争論から出現するものが多いことを明らかにした。同時のその顕彰活動を生み出す要因は、義民たちが勝取った「先例」の維持と確保であることを考察し、前章での結論を補強した。また四章では、現

在私が確認した五七二件の義民事例を、年次的・地域的に統計化したものである。その結果、義民は一七世紀後半のみに出現するものではなく、一八世紀は一七世紀後半と同程度の件数が見られること、一七世紀前半と一九世紀にも数多くの義民件数を確認した。

しかし、一八世紀以降の集团的闘争から生み出されてくる義民たちも、佐倉惣五郎の義民物語へ同化していく傾向が見られる。義民物語と義民顕彰行為は、百姓一揆を集団の非合法闘争である強訴から、英雄の個人的な行為である越訴に改変していったのである。そては一九世紀以降の村落上層部を核とした運動として、広く全国に展開したものであった。